

Y6-14

術前オリエンテーションがもたらした
外来からの退院調整支援

武蔵野赤十字病院 看護科

小森 景子、立石恵理子、勢川 政美、

齋藤 恭子

【はじめに】当院外来では、周手術期患者・家族の入院手術へのスムーズな適応支援を目的に3年前から専任の看護師が術前オリエンテーション（以下『術前オリ』とする）を開始し、月約250件の術前オリを行っている。面談中に、入院手術に対する不安や質問だけでなく、術後の生活に対する要望や相談を受けることがあり、入院前から退院に向けた支援を行う必要性が見えてきた。退院後の生活を見据えた、外来からの退院調整支援の取り組みについて報告する。

【方法】術前オリで患者の基礎情報と術後生活への不安や要望を聞き取り、院内退院調整スクリーニング基準（10項目）と、実践から見えてきた留意点（5項目）に配慮しながら、退院調整の必要性をアセスメントした。支援が必要な場合、関連部署へ情報を伝達し対応を依頼した。

【結果】平成23年1月～3月の間、術前オリは821件。退院調整が必要とアセスメントした件数は22件（約2.67%）。その中で、入院後、退院調整が行われたのは18件（約81%）となった。調整内容は1. 経済的不安への支援：10件。2. 退院後の生活への要望対応：6件。3. 身寄りがなく生活支援を調整：4件。4. 生活支援の再調整：2件。多職種合同カンファレンスを開いたり、地域の包括支援センターが関与したケースもあり、術前オリからの情報は退院調整に活用されていた。

【考察】支援が必要とアセスメントした22件のうち18件が退院調整に繋がっており、アセスメントは有効だったと考える。入院手術による様々な変化に対応して生活できるかどうか、サポートできる家族や環境の有無が、アセスメントの重要ポイントと考える。

【今後の課題】今後も取り組みを継続し、早期介入による退院調整支援がもたらす患者ニーズの充足や経済的な成果を明確にしていく事が課題である。

Y6-15

A病院でストーマ造設術を受けた患者の
ストーマケアの状況について

姫路赤十字病院 看護部

まつもと ゆみこ
松本由美子

ストーマ造設術を受けた患者に対して皮膚排泄ケア認定看護師と病棟看護師が協力して、セルフケア指導を行っている。手術を受ける患者が高齢化し、患者自身への指導だけでなく、家族や訪問看護師との連携を行っている症例もある。今回、A病院でストーマ造設術を受けた患者のストーマケアの状況を調査した。

2009年1月から2010年12月の2年間にA病院でストーマ造設術を受けた患者は86名であった（小児を除く）。平均年齢は68.9歳（29歳～93歳）であり、70歳以上は43名であった。患者自身がストーマケアを行っているのは男性は29名、女性は27名だった。

60歳代の女性では6名全員が患者自身がストーマケアを行っているのに対し、男性は20名中7名が妻と分業してケアを行っていた。

70歳以上で患者自身がストーマケアを行っているのは男性は8名、女性は13名だった。男女共に年齢とともに、患者自身でストーマケアを行うのではなく家族や訪問看護師などにケアをゆだねる患者が多くなっていた。

指導する際に、まず患者自身がストーマケアができるかを考慮しながら指導しているが、高齢になると様々な問題から他者にケアをゆだねていることがわかった。今後は、MSWや退院調整看護師との連携だけでなく、訪問看護師やデイケアの職員などとも連携をはかり、退院後の生活が少しでも支障をきたさないように、かかわっていく必要がある。